
番外編～拝啓、貴方に～

梨栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編〱拝啓、貴方に〱

【Nコード】

N7033Y

【作者名】

梨栖

【あらすじ】

江戸と京。人と人との意志の疎通をするにはあまりにも遠い距離だった。

(前書き)

京にある、数少ないポストの中に文を投入した白い細い手。

「須藤はん！ 用事終わりましたー？」

「あ、はい！」

「ほんなら行きますえ」

「はい！」

ポストに手紙を入れて、中年にしては若々しい女性の方へと走って行く少女。

その手紙の封筒には『真選組様 須藤恋歌』と楷書文字でかかれてあった。

京の町は、江戸とは何もかも違う。

それが恋歌が、初めて京に抱いた印象だった。

『攘夷びいきの都』というだけあり、京行きの電車を降りて広がる光景は、侍の国だった頃のように。

なので、スーパーやコンビニも恋歌はまだ見つけてない。つまり
聖書ジャンプもない。

同時に、ここには江戸とは桁違いの数の浪士が街中を堂々とうろ
ついている。

そして此処、古代からの都では、恋歌のような者を見る目は些か冷たいものであった。

もっとも、江戸にいた時も、真選組の評判は決して良くはなかったが。

京の生活もそれなりに馴染んで、このように友達も出来た。

なので、楽しくない事はない。

それでも時々、何時になったら、と思う。

一体何時になったら江戸へ帰って、大切な人達と共に暮らす事が出来るようになるのだろうか。

いくら詰め所の人間が優しくて、居心地はいいとはいっても、やっぱり寂しい。

そう思いながら、恋歌は深い溜め息をついた。

「そういえば、あんたが京^{こし}へ来て、随分経つなあ」

買出しを手伝って欲しいと外へ連れられた、詰め所の女中が口を開く。

「そうですね……来たばかりの時は暑い暑い言うておったのに、もう葉が落ちていく」

「そう言うたら、須藤はん。もうすぐ誕生日やとか言うてませんでしたっけ？」

「はい。まあ銀魂がサザエさん方式ゆえ誕生日を迎えたところで年は変わりませぬが」

「いや、そんな言わんといってくれる？　悲しなるやん」

女中の冷静なツツコミを受けて、エヘへと笑ってみせる。

同じ様に恋歌に笑い返して、女中はそのまま、話を続ける事にした。

「ほんなら今からでも贈り物考えななあ。何か欲しいもんとかある？」

「いや、私はその……貰える物なら基本的に何でも嬉しいです！」

「その返答が一番困るんよ。んー……そやなあ……」

と、女はしばらく考え込んだ顔をしたが、やがて何かを思いつい

た顔を恋歌に向け、言った。

「せや。せっかくやしお誕生日くらい江戸に帰らはったら？」

「へあ？」

突然の、突拍子もない提案に思わず間拔けな声を出した恋歌。

何を言っているんだこの人……

「あーでも日帰りで江戸も何やし……誕生日の週丸々休暇とりいな！」

「えへえ！？」

何を言っているんだこの人は。頭がパニックになっている中、頭の冷静な部分がそう思っていた。

一時とはいえ、そんな事で江戸に帰れるくらいなら、とうにそうしているものを!!

「今まで頑張ったし、ちょっとくらい里帰りしても誰も何も言わんやろ!」

そや!　それがエエわ!!　と満足げに笑いかける女中。

直視できなくて、目線を伏せた恋歌が、ボソツと呟いた。

「そりゃ……帰りたいですけど……」

「ほんなら決まり!」

女中は、恋歌の言葉を遮って、彼女の肩をドンと叩いた。

「しかし、仕事などは……！」

「その点も心配要らん。所長さんにはウチから話しといたるから！」

と言いながら、ゴキツと拳を固める女中さん……もとい詰め所所長夫人。

確かに彼女なら……恋歌の表情は所長の身を案じ、一瞬暗くなつたが、すぐに明るくなった。

「……さ、佐藤さん……！！！」

「いや、ウチ斉藤やねんけど」

「……帰れたら真っ先に何したい？」

買出しの帰りに、女中改め斉藤は、荷物で両手がふさがった恋歌に問う。

「友達の家に挨拶巡りして、それから屯所に帰ってゆっくり仲間と話がしたい」

至極嬉しそうな顔でそう言う恋歌に斉藤は、そうか。と返した。

「待っとう仲間を気にかけるんもエエけど、あんまり待った男

ほったらかしにしたりなや？」

「はっ……！？　　いいいいいいないしっ！！そんなもん！！」

「それは悪い事言うたなあ。こんなかいらしいお嬢さんやからてっきりおるもんやと……」

耳まで蛸の様に赤くした少女を、軽くあしらっていさめる。

「絶対からかっておろう！！　　佐渡山さん！！」

「いや、斉藤やて」

斉藤のツツコミを聞き流しながら、『男』……と頭の中で反芻する。

「副長。失礼します」

所変わって江戸、真選組屯所。

副長室と、縁側を仕切る襖から現れた山崎は、何やら文を携えて現れた。

書類を捌いていた土方の背中に要件を続ける。

「須藤さんから、文が届きました！ 副長が最後ですよっ！」

その言葉を聞いた時、土方は少しだけ筆の動きを止めた。

少し前に京へ旅立ってから、とんと連絡を寄越さなかったあいつが……

記憶が自然と、駅のホームまで蘇り、いやいやと頭を細かく左右に振る。

「それで局長は、返事は副長に任せるとの事だそうです」

「……分かった」

山崎は、大して気にした様子もなく、失礼しましたとさがっていった。退だけに。

土方は迷わずに、文の封の口を丸めて、中身を取り出した。

『拝啓。真選組一同様。

長い間、文の一本も寄越さずに申し訳御座いません

言い訳にしかりませぬが、この頃になってようやく京の治安が比較的落ち着いたのです

今回文を書いたは、検挙した浪士や、治安の報告を纏めてするためにございます

近年の京は、噂通りに荒れており……』

文字を追っても追っても、他愛もない、事務的な文章が続く。

そうこうしている内に、文も最後の一枚となってしまった。

『局長、妙殿へのストーキングも結構ですが、死んでいませんか？生きてますか？』

総悟はまた元気に、江戸の街を破壊していますか？

李麻は、チャイナ娘と遊んでばかりですか？

や……山……えーっと……あ、山岡は相変わらず奥さんと喧嘩してばかりですか？

土方は、相変わらず眉間に皺寄せて、チンピラだなどと呼ばれていますか？

京の生活も、それなりに楽しいけれど、皆がいないと寂しいです。

早くまた皆と一緒に暮らせるよう、お勤めを果たしていく所存に御座います

その日まで、誰一人欠けることなく、元気でいて下さい。

須藤恋歌』

消印の日付が一昨日。どうやら無事そうで、ひとまず安堵した。

あくる日の京の朝。

久々の非番のため、ゆっくり寝ようと布団を被っていた恋歌。

しなりしなりと足音がすると思ったら、障子が薄っすら開け放たれ、一筋の光を作った。

「あらま。起こしてしもた？ 堪忍」

「……斉藤さん？」

「寝起きでボケる気力もないみたいやねえ。あ、そうそう。鬼の副長さんから手紙の返事来てますえ」

「え！？」

布団を全身に被って、かたつむりのように顔だけ出していた恋歌が、この瞬間ガバツと起き上がった。

「それともう一つ吉報や。所長さん、須藤はんの一時帰還、承諾するみたい」

其方にも教えたつといてと、強かに目配せをしてから、斉藤はそつと襖を閉めた。

文……土方からの……否応なしに震える指先で封を破いて中身を取り出した。

『拝啓 須藤恋歌殿』

近況報告及び、我々の身まで案じて貰い、感謝します

我々の方も、相変わらずですが何とか今日まで生きていますのでひとまず安心して下さい

治安が落ち着いてきたとはいえ、年末年始にこそ、仕掛けてくる浪士はいます

消して油断だけはしないように

後、あまり仕事をサボって、其方にご迷惑をかけないように

好き嫌いはしない。サラダにマヨが乗っていようと我慢して食べる

先方にあまり粗相をしでかさない事だけくれぐれも頼みます
土方十四郎』

「お母さんか!!」

と一人の部屋でツツコミを入れながら、文を畳に叩き付ける。

別に、気の利いた言葉など期待してはいなかったが、あんまりだ。

もういいやとしまおうとした時、投げ付けた文が二枚重ねになっていたことに初めて気が付く。

恐る恐る、下に使っていた紙の上に、改めて文を読む。

『P S ..あんな長々とした文を送り付けられても困ります

これからは小まめに、文でもメールでも電話でも報告を入れてください

皆には私から言っておきます』

恋歌は、文を抱くようにして胸元に手繰り寄せて、笑みを浮かべる。

それから、枕元においた携帯電話に手を伸ばした。

12月10日。その週まで、待っていて。

(後書き)

これが前に言ってた「いい夫婦の日小説」にございます！

フライングなんですけど！！

別にイチチャイチチャはしてないんですけど！夫婦描写ないんですけど！！

12月10日の恋歌の誕生日投稿につなげるためのことなんですけど！

いや、あの幕臣さんの書くお手紙って堅い文面じゃないですか！言い回し方くどいじゃないですか！！それでもお互いの身を心配してるとか萌えるな〜と思って書いた次第です^^自己満ですゴメンナサイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7033y/>

番外編～拝啓、貴方に～

2011年11月21日09時41分発行